
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 139

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 2761. バッハに範を求めて:イタリアとエジプトへの旅行の再考
- 2762. 一日の始まりに
- 2763. コーヒーと手荒れ
- 2764. 三つ目の修士課程の終わりに向けて
- 2765. 二つの喪失体験
- 2766. フローニンゲン大学での二年目のプログラムの終了に向けて
- 2767. 如性の歌・如性の踊り
- 2768. 現代社会のせわしない流れ:消費者に貶められる現代人
- 2769. 投資教育についての続き
- 2770. 論文の完成に向けて
- 2771. 充実感を予感させる土曜日の朝
- 2772. イマージュが宿る場所:詩的世界への関心の再燃
- 2773. 本日の振り返り
- 2774. 友人のピアノコンサートに参加して
- 2775. 新緑のリズム
- 2776. 散りばめられた宝石
- 2777. この世界の輝き
- 2778. 主体客体作用を持つ日記の執筆
- 2779. 今日の活動に向けて
- 2780. 外

時刻は午後の八時に近づきつつある。この時間帯はまだ夕方のような明るさである。西日が街路樹の葉を照らしており、葉は穏やかな風に揺れている。遠くの方から小鳥の鳴き声が時折聞こえてくる。

今日一日を振り返ってみた時、非常に充実した一日だったと言える。チーズ屋でお決まりのチーズとナッツ類を購入し、自宅に戻ってきてからはシュタイナーの書籍“Art as Spiritual Activity: Rudolf Steiner’s Contribution to the Visual Arts (1998)”を読んだ。夕食前に無事に一読目が完了した。本書に関して言えば、後半に掲載されているシュタイナーの講義よりも、英語の翻訳者が解説した前半部分の方が圧倒的に得るものがあつた。今後また本書を読み返すことになるだろうが、その時は特に前半部分の内容を集中的に読み返したいと思う。

今日はこれからバッハに範を求めて一曲ほど作る。今日はここまですでに二曲を作っている。一日に三曲ずつ作っていくというのは理想的なリズムであるため、こうしたリズムが生まれ始めていることが大変嬉しい。とにかく日記を書き続けること、曲を作り続けること、それらの実践の中で毎日を形作っていくことがどれほど充実感と幸福感を私に与えてくれるかは計り知れない。

今日もそれを実感していた。これから範を求める曲は、ロンドン王立音楽院で購入した楽譜の中に掲載されているものである。売店の店員を務める学生も述べていたが、この楽譜の学習価値は非常に高い。それは演奏者だけではなく、作曲をする者にとっても非常に価値のあるものだと思う。この楽譜のタイトルは、“Bach: 371 Harmonized Chorales and 69 Chorale Melodies with Figured Bass (1941)”というものであり、タイトルにあるように、合計で440曲ほどの短い楽曲が収められている。

作曲をするという観点でこの楽譜を眺めてみると、一曲一曲から学ぶことが極めて多いことに気づく。実際に今私はこの楽譜を参照しながら、できるだけ毎日一曲ほどバッハに範を求めて曲を作るようにしている。もちろん、時間の都合上、そして他の作曲家の曲に範を求めたい日もあるため、時折抜けてしまう日もあるが、基本的には毎日一つ詰将棋を解くような感覚でこの楽譜を参考にして曲

を作っている。今日もこれから一曲ほどこの楽譜に範を求めて作る。それが終われば本日の実践は終了だ。

夕食前にふと、秋に予定していたイタリアとエジプトへの旅行はもっと後でいいかもしれないと思った。何をきっかけにそのようなことを思ったのか定かではないが、とりあえずイタリア旅行とエジプト旅行は保留にしようと思う。それらの国へ足を運ぶ強い動機がなくなってしまった。それらの国に訪れるのがまだ時期尚早なのかもしれない。

確かにエジプト文明への関心は未だに高いが、ライデンの博物館、ルーブル美術館、大英博物館などで古代エジプトの所蔵品を数多く見てきたためか、それほど現地に行って何かを見ようという気持ちにならない自分がいる。もちろんピラミッドを実際に現地で見ることは非常に大きな意味を持つだろうが、今はピラミッドを見ることにすらあまり関心を持てなくなっている。それよりも北欧の自然の中でゆっくり過ごすことの方に惹かれるものがある。

また、冬にオーロラ観測のクルーズに参加しようと計画しており、それもあってイタリアとエジプトへの旅行は今年は控えていいかもしれないと考え始めている。このあたりについてはまた改めて考えたいと思う。フローニンゲン:2018/6/27(水) 19:59

2762. 一日の始まりに

今朝は六時前に起床し、六時半を迎える頃に一日の活動を開始した。起床した時には朝日がすでに昇っており、澄み渡る青空が広がっていた。今は一切の風がない。輝くような一日がまた始まったことを感じる。

早朝にヨガの実践を行い、心身の調整を図った。今日は外出する予定がないため、午後に念入りにヨガの実践を行いたいと思う。外出をして歩く日には午後のヨガを控えめにする。一方で何も外出をしない日には午後のヨガの時間を多く取るようにしていく。

今日も昨日に引き続き、日記と作曲実践を核にした一日になるだろう。今日もこれからまずは作曲実践を行う。ここのところショパンのマズルカに範を求めることが多く、その促しがまだ収まらないの

で今日もショパンのマズルカを参考にする。一日全体を通じた作曲実践の計画として、昼食前か午後一度モーツァルトの曲に範を求め、夕方か夜にバッハの曲に範を求めて作曲をしたいと思う。

朝昼晩の三回に分けて作曲を行うというリズムが徐々に姿を現し始めてきた。これはとても望ましい。確かに理想を言えば、日記を書くのと同じ回数だけ作曲ができればと思うが、そうした状態に至るためにはまだまだ修練を積んでいかなければならない。作曲に関する知識的にも技術的にもである。

今日は十分な作曲実践をすることに並行して、“Music and the Mind (1997)”と“Vincent van Gogh: His Spiritual Vision in Life and Art (2015)”の二冊を読もうと思う。どちらも共に今回が一読目であるため、細部に囚われることなく、まずは全体を把握するかのような読みを心がけたい。本日の読書はこの二冊に留める。書物を読む時間が仮にあったとしたら、ロンドン旅行で購入した種々の画集を眺めたいと思う。作曲と読書に合わせて、今日は特に昼食後に過去の日記の編集を行いたい。

随分と溜まってしまった日記を編集し始めてしばらく経ち、今は積み残しになっていた日記の半分ほどの編集が完了したのではないと思う。今日は昼食後と一日の中で空いた時間を用いて日記の編集作業を積極的に進めていきたいと思う。

早朝の六時半を過ぎた今、朝日が街全体を明るく照らしており、一日が完全に始まったことを告げている。近くで小鳥が鳴いているのが聞こえる。先ほどまでは一切無風であったが、今は微風が流れているようだ。風が動き出したのを見て、私も一日の活動をこれから本格的に始めようと決意した。
フローニンゲン:2018/6/28(木)06:40

2763. コーヒーと手荒れ

澄み渡る水が流れているかのような一日が始まってしばらく経つ。空は大海のように青く、巨大な水の器のように見えてくる。微風がフローニンゲンの街を駆け抜けている。ただしそれは急ぎ足ではなく、ゆっくりとした足取りで通り過ぎていく。

早朝のこの時間帯は気温が低いので、書斎の窓を開けていると寒くなってきた。今は窓を閉めている。午後からは暖かくなるようであるから、気温が上がった時にまた窓を開けたいと思う。

ロンドンに訪れた時にふと、フローニンゲンで生活をしている時は少々コーヒーを飲み過ぎていたのではないかという反省が起こった。フローニンゲンに戻ってきてからは、一日に飲むコーヒーの量を減らした。今日からは午前中と午後一杯ずつ、合計で二杯だけコーヒーを飲むような習慣を確立したいと思う。そもそもコーヒーの量を減らそうと思ったのは、夏を迎えつつある今においても手荒れが治らないことに起因している。

良質なハンドクリームを塗っていても手荒れが完全に治らない状態が秋以降から続いていた。最初私はオランダの水の質によるものだと思っていた。しかしオランダの水の質は良い。食器を洗う洗剤も刺激のほとんどないものを使っていたが、それでも手荒れが治ることはなかった。肌の他の部分については荒れていないから最初はこの洗剤などの影響によるものだと思っていたが、どうも洗剤に原因があるわけではなさそうだ。

手だけが荒れるということなので、普段の生活の中で手の皮脂を無駄に奪ってしまうような行動を取っているのかもしれないと思い、一度目星の行動を列挙した。すぐに思いついたのは手の洗いすぎかと思い、手を洗うことを極力少なくした。だがそれでも手荒れが治ることはなかった。手荒れの治癒に関して八方ふさがりになっていたが、時折出かける旅行中に面白い現象を見つけていた。

不思議なことに、旅行中は手荒れが軽減され、滞在期間が長くなるにつれて手荒れが治っていくのである。そこから私はフローニンゲンでの生活と旅行中の生活の差を考えてみた。するとそこに見つけたのは、一日に摂取するコーヒーの量が違うことだった。旅行中も確かにコーヒーを飲むが、それはフローニンゲンでの生活ほどではない。

フローニンゲンは秋から気温が低くなるということもあって、秋以降に一日に摂取するコーヒーの量が随分と多いことに気づいたのである。そこから一つの仮説として、コーヒーの摂取量を減らしてみた時に手荒れの状態がどのようになるかを観察してみることにした。

もちろん人によって手荒れの原因は様々だろうが、私の場合はどうもこの仮説通りのようらしい。数日前からコーヒーの量を減らしてみたところ、手荒れの状態が改善されてきている。そうしたこともあり、今日からはコーヒーの量を減らし、午前中に一杯、午後一杯だけ飲む生活を確立したいと思う。

時刻は午前八時を迎えつつある。起床からここまでの時間にかけて、日記を二つほど執筆し、以前作った曲を二曲ほど編集することを行っていた。こうした作業は一日の活動を始める上で本当に良い準備になっているようだ。これから本格的に午前中の作曲実践と読書を行おうと思う。フローニンゲン:2018/6/28(木)07:59

2764. 三つ目の修士課程の終わりに向けて

今しがた書斎の窓から通りを行き交う人たちの様子を眺めていた。自転車を漕ぐ人たちの表情は明るく、今日のような清々しい天気の中を自転車で走るのはさぞかし気持ちがいいだろうと思う。

フローニンゲンの上空には雲一つない青空が広がっていて、窓の外には涼しげな風が吹いている。風に着目してみると、風とは本当に生き物のようなのだと思った。というのも、起床直後には無風状態であつたにもかかわらず、今は小刻みなダンスを踊るかのような生き生きとした風がそこにあるからである。風も生きているのだ。

風は地球の呼吸であり、そこには生命力が溢れている。ゆっくりとした深呼吸の時もあれば、早い呼吸の時もある。地球は生きており、風も生きているのだということに気づく。

早朝にショパンの曲に範を求めて早速一曲ほど作った。いつも作曲実践をしていて気づくのは、作曲実践をするたびに明示的・非明示的な学びを絶えず行っているということである。具体的には、過去の作曲家に範を求めながら曲を作っていると、そこには言語化が可能な気づきや発見がある時が存在している一方で、言語化までは至らないが身体的に確実に何かを学んでいるという感覚が絶えずしている。

後者はもしかすると作曲における暗黙知のようなものなのかもしれない。各作曲家には固有の作曲語法が備わっており、それは彼ら固有の暗黙知の塊であるかのようなのだ。そうした暗黙知から何かを汲み取るように作曲実践を進めている自分がいる。言葉になるものはできるだけ言語化し、言葉にならないような身体知的経験を数多く積む過程において徐々にそうした暗黙知を形式知にしていきたいと思います。昼食前にまた作曲実践を行いたい。

論文アドバイザーのミハエル・ツショル教授の都合により、修士論文の提出が少しばかり後ろにずれ込んだ。当初の予定では六月の半ばに提出する予定だったのだが、結局七月の第一週に提出することになった。ロンドンへ旅行する前にすでに論文の最終原稿が完成しており、数日前に最後のフィードバックを受けた。明日と明後日に集中的に論文の最終レビューを行い、日曜日には提出用の論文を完成させたいと思う。

論文の提出日には、今回の研究結果の発表機会があり、それについては前回と同様にポスター形式で行うのかパワーポイント形式で行うのかをプログラムコーディネーターのマイラ・マスカレノ教授に確認しておく必要がある。

来週の水曜日に論文の提出をし、研究の発表を行えば、無事に欧米での三つ目の修士課程を終えることになる。そこからは一旦学術機関に所属するのをやめ、自らの関心に沿う形で旺盛に探究活動に打ち込みたいと思う。フローニンゲン:2018/6/28(木)09:55

2765. 二つの喪失体験

先ほど昼食を摂り終えた。いつも通り、たんぱく質の多いサラダだけを昼食として摂った。これから午後の仕事に取り掛かる。

午前中にふと、心は場所に転移するのかもしれないということを思った。休憩がてら書斎の窓の外から何気なく景色を眺めていた時に、幼少期の頃に住んでいたアパートについて思い出した。

今ではもうそのアパートは取り壊されてしまっている。振り返ってみると、これまで自分が住んでいたアパートのほとんどは取り壊されてしまっているのではないかと思った。そこからふと、なんとも言えない喪失感のようなものが湧き上がってきた。昔自分が住んでいた場所がもはや物理的に存在していないということ。それがこうした喪失感を引き起こすことについて考えざるを得ない自分がいた。

心は場所に住み着くものなのだ。そんなことを思う。

そこからさらに、自分が過去に住んでいた街そのものが物理的に消えてしまったらどうなるのかについて思いを馳せていた。先日、東京が自然災害リスクで世界一であることを知った。仮に東京が災

害に見舞われ、東京が壊滅的な状況に追い込まれた時、自分は多大な喪失感を感じるのではないかと思わされた。

2011年の東日本大震災の被害が拡大している時、私はサンフランシスコでの生活を始めていた。このたび西日本を襲った豪雨の時はオランダで生活をしていた。日本を災害が襲うたびに、私の無意識は不可避に喪失感を覚える。

場所には人間の精神が宿っているに違いない。そしてそれは集合的無意識の領域で繋がっているに違いない。

紺碧の空、初夏の昼間の太陽の輝き、これほどまでに心を解放させ、これほどまでに心を落ち着かせてくれることはないであろう景色が目の前に広がっている。そうした景色を眺めながら、私は心が場所に転移する特性について思いを巡らせていた。

時刻は昼の一時を迎えたが、今朝方の夢の内容について覚えている。正直なところ、それについて書くまいとしていたが、やはり覚えている範囲のことを書き留めておきたい。この夢はとても悲しい内容のものだった。夢の中で私は実家にいた。

久しぶりに愛犬に会えることを楽しみにしていたのだが、どうもその姿が見えない。父の姿も見えなかったため、愛犬は父と一緒に散歩に出かけているのかとその時は思った。すると母が私に声をかけてきた。見ると、母のそばには可愛らしい一匹の子犬がいた。

現在飼っている愛犬は男の子であるが、その犬は女の子であった。また新しく可愛らしい犬が家族に増えたことを私は一瞬喜んだが、以前両親が述べていたことについて思い出した。別の犬を飼い始めるタイミングがどういった時なのかについて思い出したのである。それを思い出した時、大きな悲しみが突然襲ってきた。

愛犬はもうこの世にいないということ。その事実を間接的に知った時、私は慟哭に襲われた。これほどまでに激しい悲しみに襲われたことは未だかつてなかったように思われた。そこで私は目を覚ました。目をさますと、薄暗い景色が寝室の窓越しに見えた。

今朝方の夢の中で大きな喪失感を覚え、午前中にもまた別の喪失感を覚えた。連続して二つの喪失感を経験したことの意味はなんだろうか。これら二つの経験は私に何を伝えようとしているのだろうか。

遠くの空に一羽の鳥が駆け足で飛んでいく。どこか知らない世界に飛んでいく。フローニンゲン：

2018/6/28(木) 13:20

2766. フローニンゲン大学での二年目のプログラムの終了に向けて

今日は普段よりも遅く六時半に起床した。目を覚ましてみると、辺りは朝日に照らされていてとても明るかった。午前七時を回った今は昼のような明るさを見せている。天気予報を確認すると、これからの七日間は少なくとも腫れが続くようだ。今日は天気に恵まれ、気温も程よい暖かさのため、昼食前にランニングに出かけたいと思う。

昨夜は早く就寝したのだが、今日の起床は遅かった。そういえばロンドンから戻って以降、昼の仮眠中に意識の深い層まで降りていき、20分の仮眠の後にすぐさまそこから戻ってくるのが難しい状況が続いている。

旅が自分の無意識の層に働きかけ、旅から帰ってきた今はその調整を行っているのだろう。今日の昼前にランニングをすることがこの調整作用を促進するかもしれない。いずれにせよ、ロンドン旅行を通じて自分が無意識的に得ていたものは多く、それを咀嚼するにはやはり時間が必要だったという事だろう。

来週の水曜日にはこの一年間取り組んできた研究の結果を発表する機会がある。現在所属している教育科学学科が主宰するフォーラムに参加し、そこで発表を行う。このフォーラムは来週水曜日の午前中に行われ、そこでの発表をもってして無事に今回のプログラムを終了する。フォーラムでの発表に向けた準備を今週末に行っておきたいと思う。

発表時間は長くなく、先月末にアムステルダムで行われた国際ジャン・ピアジェ学会で行った発表と同じく15分程度だ。質疑応答を入れると20分ほどの発表となる。研究計画に関する発表は以前が

スタープレゼンテーションとして行い、今回はパワーポイントを用いた発表となる。発表時間が15分であるため、スライドの枚数はそれほど多くない。

研究概要、リサーチクエスション、分析手法、分析結果の四つの項目を軸にし、週末にスライドを作っていきたいと思う。自分が一年間取り組んだ研究であるため、その内容を熟知しており、スライドを作ることは比較的容易だと思う。また、研究発表の準備に合わせて、論文の最終レビューを行う必要がある。それは今日の午後から集中して取り組む。

ランニングから帰ってきて昼食を摂り、そこから集中してレビューをすることによって、可能であれば本日中に大半のレビューを終わらせておきたい。明日と明後日に二回に分けてレビューをすれば論文の最終稿が出来上がるだろう。

今日はまず、先日論文アドバイザーのミハエル・ツショル教授から頂いた最後のフィードバックコメントをもとに、文献調査のセクションを修正する。最終レビューではこの修正が一番時間がかかるだろう。この箇所の修正さえ済めば、最終稿が出来上がるまであと少しとなる。いよいよフローニンゲン大学の二年目のプログラムが終わりに近づいている。

研究発表の準備と論文の提出に向けたレビューがあるため、来週の水曜日まではそれらに集中する必要がある。日記の執筆と作曲実践については毎日の習慣として継続していくが、作曲理論の解説書を読むのは水曜日以降にしたい。

来週の水曜日を終えた後、いよいよ欧州での三年目の探究生活が本格的に始まることになる。これからの一年はこれまでの二年間とは全く異なる投入量の探究と実践を行うことになるだろう。フローニンゲン:2018/6/29(金)07:30

No.1111: Vigor of Summer

It is raining today after a long time. Thanks to it, it is very cool today. Yet, I can feel vigor of summer on such a day. Groningen, 07:42, Wednesday, 8/8/2018

ロンドン旅行から帰ってきて二日間ほど文章を書く内発力が弱まっていた。その代わりに、内側で何かを静かに発酵させていくような力が働いたように思う。同時に、旅による変容作用を咀嚼するかのよう、心身に調整が入っていたことも見逃すことはできない。この二日間と異なって、今日からはようやく文章を書き留めておこうとする内発力が戻ってきたかのようだ。

今日は本当に澄み渡るような空が広がっている。書斎の中にショパンのワルツが流れている。

初夏の早朝の風も笑いながら踊っている。真っ当な人間であれば風の笑顔に容易に気づくことができるだろう。

自然はいつも私たちに何かを教えてくれる。自らが狂気の沙汰にあるのかどうか、現代社会によって感覚が麻痺されてしまっているのかどうかなど、諸々の気づきを自然は教えてくれる。風の笑顔に気付けないのであれば、それは何らかの病の兆候であり、そうした病の兆候に気づけなくなっているのであれば、それは重病を患っていることを示している。

いつの間にか今週も金曜日を迎え、平日の最後の日となった。曜日など全く関係ない日々が続く。そこにあるのは自分の内側の時間感覚のみであり、そうした時間感覚の中で営まれる日々の実践だけである。

人生のこの川の流れに身を任せながらあの川に向かっていくことができればと思う。ここ最近、あの川の存在が強く自覚される。誰もが向かうあの川に自分も少しずつ向かっているのだという明確な気づき。

青く澄み渡った大空を舞う鳥たちは本当に元気がいい。それを見ているこちらも元気になる。

私は欧州に来て初めて、「鳥が鳥である」という鳥の如性に気づいた。端的には、鳥があるがままの存在であることを明確に把握する大きな体験があり、それ以降、鳥の見え方が一変した。

正直なところ、他者に対して、いや家族を含めて、自分以外の人間は自分以外の人間であると区別されてしまうのだが、如性に気づかされた鳥に対しては別の感覚を持っている。書斎の窓際に近寄ってきた鳥を見ると、それと自分が同一化するという不思議な体験をすることが増えてきた。そこには鳥と自分との区別はないのである。鳥の如性に気づく瞬間に、自分の如性に気づく。それはまさに「我に返る」ような体験なのだ。

この体験が示唆していることは、鳥に固有の如性があるのと同じように、自分に固有の如性があるということである。そしてもう一つは、それら二つの異なる如性は重なり合うことができるということである。さらにもう一つこの体験が示唆している重要なことは、それは私と鳥だけの間で起こることではなく、本来は他の人間との関係性の中でも起こり得るということである。

私は今はまだ他者の如性がわからない。他者の如性に触れた体験がないのであるからそれは正直にそのように言わなければならない。そうしたことから、自分はまだ道半ばなのである。ここから少しずつ他者の如性に対する眼が開かれていくことを望む。

小鳥たちのさえずりが聞こえて来る。彼らは如性の歌を歌っている。

鳥たちが空を舞っている。彼らは如性の踊りを踊っている。フローニンゲン:2018/6/29(金)10:40

No.1112: In a Creamy Field

Everyday, I can sense something soft inside myself. It looks like as if I were walking in a creamy field. Groningen, 08:05, Wednesday, 8/8/2018

2768. 現代社会のせわしない流れ:消費者に貶められる現代人

フローニンゲンでの落ち着いた生活が再び始まったことを嬉しく思う。もう少しで午前11時を迎えるため、これからランニングに出かけたいと思う。今日はノーダープラントゾン公園を走る。その帰りに近所のスーパーに立ち寄り、必要なものを購入したいと思う。

今日は本当にランニング日和であり、金曜日ということもあってか、時の流れもいつもより緩やかに感じる。緩やかに流れていく時を感じる事がどれほど重要か。その点については、大都市に時折

足を運ぶ際にいつも思う。大都市に流れるあの鋭利的な時の流れの速さ。それは現代社会のせわしなさを醸し出している。また、そのせわしなさは愚かなほどである。私たちは決して愚かなほどにせわしく生きるために生まれてきたわけではないはずである。

私たちは自分の内側に流れるゆっくりとした時の流れを取り戻す必要がある。大都市に足を運ぶといつもそのようなことを思う。

自分の内側の流れの中で生きているのではなく、外側のせわしない速さで流れる流れに流されていることに気づかなければならない。実際には、それに気づけない人がほとんどであるほどに事態は深刻なのだが。

ロンドンを訪れた時に新たに得た一つの気づき。それは芸術教育と投資教育の重要さであった。それらの重要さについて少しばかり考えを巡らせる日々が続く。一年前から私は作曲実践を始めたが、音楽の作り方について学校で教えてもらったことは一度もない。同時に、この金融資本主義の社会の中で生きていくために必要な資産の作り方についても学校では教えてもらったことはない。つまり学校では創造する方法を教えてもらえず、この金融資本主義の社会の中で単に消費行動に煽られる形で生きていくのではなく、資産を形成していく方法について一切教えてもらわなかったのである。

現代の教育は本当に形骸化してしまっている。あるいは、本当に大切なことを教えてくれないと言える。

常に私たちは芸術の消費者のままであり、経済的な消費者のままである。「消費者のまま」というよりもむしろ、「消費者に貶められている」と言った方が正確かもしれない。

もともと私が日本の大学で専攻していたのは、金融・経済・会計であり、とりわけここ最近は投資の観点でそれらの分野の大切さを実感している。だが、ここでも大学で習ったことは消費者から脱却することや資産を形成することに直接的には結びつかないことがわかる。残念ながらこの現代社会においては、それらの方法は自分で学ぶしかないのだ。

自らの魂の声に気付き、ある種の使命に向かって行動を起こそうとするとき、その使命が経済的な生活を保障するものであれば私たちは生きていくことができるが、現代社会においてはそうでもないことが多い。

ロンドンのナショナル・ギャラリーで見た傑作の作者の多くは、芸術という使命を見つけていながらも、彼らの生活は困窮したものであったことが多いことを知る。確かにそうした生活上の苦難が彼らの芸術活動を後押ししたという見方もできるが、生活の困窮から若くして亡くなった偉大な芸術家が多いことも確かであろう。仮に彼らに生活を保障する他の手段、まさに投資のリテラシーがあればどうなっていたのだろうかと考えさせられる。

今のところ自分の中では、芸術教育と投資教育がどちらも共に重要なものであるということはわかっているが、それらのつながりについては不明確である。今はそれらが独立したものとしての重要性を持っているような認識がある。それぞれに重要性について自らの体験を通じて考えを深め、二つの重要性の関係についても考察を深めていこうと思う。これからのランニングの最中にもまたそれについて考えるかもしれない。フローニンゲン:2018/6/29(金)11:13

No.1113: An Erstwhile Church

It is approaching 8AM. Now, I'm being embraced by a very peaceful feeling. It feels like I recollect a church that I used to visit. Groningen, 07:57, Thursday, 8/9/2018

2769. 投資教育についての続き

今日の天気は本当に素晴らしい。心の中で何度それをつぶやいたかわからないほどである。それぐらいに今日の天気は晴天である。雲が一切なく、スカイブルーの空が広がっている。先ほど昼食前のランニングから戻ってきて、昼食を摂り終えた。

近くのノーダープラントゾン公園をランニングしている時、日向ぼっこをしている人や日陰で本を読んでいる人たちの姿を見かけた。公園内には私と同じようにランニングをしている人もいれば、犬の散歩をしている人もいた。私は爽快な風と太陽の光のみならず、穏やかな時の流れを全身に浴びていたように思う。

ランニングの最中に、自宅を出発する前に書き留めていた投資教育について考えていた。改めて私が投資教育を重要視しているのは、現代人の多くが労働搾取の被害を受けているからではないかと思った。さらには、労働収入を得るためだけに人生の時間を使わざるをえないような状況に置かれていることを問題視している自分がいる。

正直なところ、投資に関するリテラシーを持たず、労働収入だけを得て生活することには限界があるように思う。限界というよりも、それは自らの人生の浪費に思えてくる。

現代人は絶えず消費を煽られるが、投資に関する正しいリテラシーを持って資産を形成していこうとする発想を持たない。そうした発想が生まれないような構造の中に現代人は置かれている。労働収入のために絶え間なく働かされ、絶え間なく消費に突き動かされるその姿はとても痛ましい。

自分自身を振り返ってみても、この十年間ほどは労働収入を得て生活をする日々が続いていたが、ここ最近では労働収入を得るための仕事を極力控えるようにしている。芸術教育と投資教育の重要性に気づいてからは、それを自らに課している。

自ら芸術と投資を学ぶことを日々心掛ける生活がこの数年以内に始まった。来年もしくは数年以内に、労働収入を得るための仕事は一切しないようにしたいと思う。自らの使命に合致するような仕事だけをする。また、日記の執筆や作曲などの創造活動のみに従事する。

あちらの川の流れる音が聞こえ始めて以降、生き方というものをより真剣に考えるようになった。今生きている時代の中でいかに自らの人生を歩んでいくかは一人一人に委ねられている。社会の中で謳われる物質消費的な生き方や労働収入依存型の生き方からは完全に手を切ろうと思う。そのためには日々の勉強と実践が欠かせない。ノーダープラントソン公園を走りながらそのようなことを考えていた。

今日はこれから作曲実践を行う。午前中に一曲ほど作り、昼食後にも一つ新しい曲を作る。ただしこの曲は、午前中に参考にしていたショパンの曲に再度範を求めようと思う。午前中は長調の曲を作ったので、今から短調の曲を作る。それに合わせて少しばかりメロディーを変更したいと思う。長調に特徴的なメロディーや短調に特徴的なメロディーはあるのだろうかと思う。今後はその点についても注意を払いたいと思う。

昼食後の作曲が終われば一度仮眠を取り、仮眠後は論文の最終レビューに着手し始める。論文のレビューが早く終われば、再び作曲実践を行いたい。作りに作る日々が熱く静かに進んで行く。フ
ローニンゲン:2018/6/29(金)12:59

2770. 論文の完成に向けて

時刻は午後の八時を迎えた。暮れゆく西日が光り輝いている。

今日は昼食前にランニングに出かけ、午前と午後に合わせて二曲ほど曲を作った。また午後に仮眠を取ってから夕食までの時間帯は集中して論文の最終レビューを行った。集中して取り組んだおかげもあり、レビューの山を越えたように思う。論文アドバイザーのミハエル・ツシオル教授から以前送ってもらっていた最後のフィードバックコメントの分量が多く、それを一つ一つ読みながら修正を施して行った。

改めてツシオル教授からの的確なフィードバックには感謝をしなければならない。随所随所に的確なフィードバックがなされており、指摘された箇所については私が気づかなかったような論理上の盲点ばかりであった。また、表現が曖昧な箇所についても指摘をしてもらうことによって、文章がより明瞭なものになったと思う。先行文献のレビューのセクション以外にはほとんど手直しをする箇所はなく、論文の執筆における先行研究のレビューの重要性を改めて思う。

今回は、昨年執筆した論文以上に先行研究のレビューを念入りに行ったように思う。明日も午後から集中して論文の修正に取り掛かる。本日修正できなかった箇所についてもすでにツシオル教授からのコメントは読んでおり、どのような形で修正すればいいのかのイメージがすでにある。また、残っている修正箇所はそれほど多くないため、今日ほど修正に時間がかからないだろう。

明日の午後に修正を完了させ、日曜日の午後はもう一度全体を最初から最後まで読むようにしたい。また日曜日には、水曜日に行われる研究発表用のPPTを作成する。これは日曜日中に大枠を完成させておき、細部については月曜日に完成させる。発表の時間は質疑応答を除き15分であるため、スライドの枚数は多くない。アムステルダムで行った発表のスライドを雛形にすれば、発表用のスライドを完成させることはそれほど大変なことではない。

いずれにせよ、明日は論文の修正を完成させる。それが終われば、午後七時半から行われる友人のピアニストのコンサートに参加する。形式的にはそれは修士課程の卒業コンサートとのことであり、ハープシコードの演奏を聴くことと、武満徹のピアノ曲を聴くことを特に楽しみにしている。

沈みゆく太陽が黄金色の輝きを発している。太陽が完全に沈むまでにあと二時間ほどあるだろうか。今日は残りの時間を使って、まずはバッハに範を求めて一曲を作りたい。詰将棋を毎日一つ解くように、69個の二声のコラールの一つ一つに範を求めて曲を作っていく。

毎日これを行えば二ヶ月半ほどで最後の曲まで辿り着くだろう。69曲に範を求めたら、371個の四声のコラールに範を求めていく。仮にこれも毎日一つを参考にするのであれば一年ほどの時間がかかる。一年というのはあっという間である。

どれだけ時間がかかろうとも、過去の偉大な作曲家から学びを得ていくことを毎日行っていく。作曲の技術が高まるのはゆっくりでもいい。焦らずに着実に技術を磨いていきたいと思う。フローニンゲン：
2018/6/29(金)20:12

2771. 充実感を予感させる土曜日の朝

今週も週末を迎えた。時刻は午前七時を回り、穏やかな雰囲気を持つ土曜日が始まった。

ここ最近本当に天気が良く、今日も雲一つない快晴が広がっている。風もなく、優しい朝日が街を照らしている。

今日も昨日と同様のことに従事しながら一日を過ごしていくことになるだろう。早朝にはまず作曲実践を行う。ここ最近朝一番にショパンに範を求めて曲を作ることが多く、今日もショパンに範を求めて曲を作る。早朝の作曲実践がひと段落着いたら、過去の日記をいくつか編集する。その後、昨日届いた“The Inner Nature of Music and the Experience of Tone (1983)”の一読目に取り掛かる。本書はシュタイナーが執筆した音楽に関する解説書である。

昨日本書の全体をざっと眺めたところ、本書からも非常に得ることが多いことが直感的にわかった。自分の関心のある箇所を中心に得られるものを最大限に得ていくような読みを心がけたい。本書の

一読が完了したら、もしくはある程度読み終えることができたなら、再び作曲実践を行う。引き続きショパンの曲に範を求めるか、あるいはモーツァルトの曲に範を求めるかをその時に判断したい。

昼食前に二曲目の作曲を終えるか、昼食後に跨る形で二曲目を作る。今日もそれぞれの調が持つ独特な感覚に意識を集中させていこうと思う。

今は無調の曲には関心がなく、調性をはっきりした曲を作ることに関心がある。とにかく音楽的な色のパレットを自分の中に構築していくことが必要だ。そのためには、作曲実践を積む過程の中で、自分が選んだ調について一つ一つ何回も繰り返し理解を深めていく姿勢が求められる。

現段階では調を選ぶ明確な基準はなく、いつも感覚的かつ直感的に調を選んでいる。おそらくそれぞれの調に対する理解が深まってきたら、自分なりの明確な基準で調を選択することができるようになるのではないかなと思う。それはさらに、曲の進行中に活用する転調にも大きな影響を与えるだろう。明確な意図を持ってある調から別の調に転調させることも今後可能になってくるに違いない。

今は単純に隣接する調に移行することしか念頭に置いていないが、本来転調の技術にはもっと奥深い要素があるはずである。それぞれの調に固有の特性があるのだから、その特性を活かすような転調を行っていくことが本質にあるだろう。そうした転調を実現させるためにも、まずは引き続き一つの調に対する理解を深めていくことが大切だ。今日の作曲実践でもそれを常に念頭に置く。

昼食前に二曲目を作曲することができていたら、昼食後からは論文の最終修正の続きに取り掛かる。昨日の段階ですでに何をどのように修正すればいいのかのイメージがあるため、作業に苦戦することはないだろう。またそもそも昨日に集中的に修正を行ったため、修正する分量もそれほど多くないことも好材料だ。仮眠を途中で挟んだとしても、遅くとも夕方までに修正作業を終えたいと思う。そうすれば明日に論文全体のレビューを行い、レビューされた論文を元に水曜日の発表に向けたパワーポイントを作成していく。論文の修正を無事に終え、夕食を摂ってから、友人のピアニストの修士課程修了コンサートに出かけたい。

散歩がてら歩いて30分ほどの音楽院に行き、そこで友人の演奏を聴く。今日も充実した一日になりそうだ。フローニンゲン:2018/6/30(土)07:25

起床直後には風が吹いていなかったが、今は爽やかな風が街路樹をなびかせている。今日は土曜日ということもあってか、自宅の目の前の通りを行き交う人の数は少ない。街路樹の葉が風で揺らぐ音が聞こえてきそうである。時折、小鳥たちの鳴き声が聞こえて来る。今日は小鳥たちも普段に比べて少しおとなしい。

先ほど、「寡黙な小人が今日も歩いていく」という内的イメージが浮かんできた。その小人は誰も見ていないところで今日も毎日を生きている。どこに向かっているのかも知らず、ただ歩くことだけがその人生の中にある。静かに黙って歩き続ける姿が心の眼を通して見えてくる。

そのイメージに合わせて、誰しもの内面世界にある廃墟のイメージが湧いてきた。その廃墟の周りには水が湧いている。私たちはその水を眺めたり、その水を飲んだりしながらその廃墟を後にしていく。その廃墟はどこか哀しみの色を帯びているのだが、その廃墟は廃墟としての存在意義を持っている。

目の前に広がる外の明るさ、そしてこの瞬間の自分の内面世界の明るさにもかかわらず、自分がどうしてそのような連続するイメージを見ていたのかはわからない。私たちが持つ内的イメージというのは本当に奥深い性質を持っている。そもそもそうしたイメージが生まれてくる根源はとても神秘的だ。イマージュが宿る場所。それについて思いを馳せる。

イマージュが生成する場所は創造の源だと言えるだろう。そこから内的イメージのみならず、言葉が生まれてくる。音楽や絵画もこの場所から生まれてくるに違いない。詩というものもこうした場から生まれてくるのだろう。それが喚起する固有のイメージや感覚についての関心が高まってくる。近々少しずつ詩的言語についても学びを深めていきたい。

学びを深めるというよりは、実際の詩を鑑賞することを大切にしたい。ひと月前に訪れたアムステルダム・ゴッホ美術館にせよ、大英博物館にせよ、そこのショップで日本の俳句が英訳で置かれていたことをふと思い出す。私はそれを見つけるたびに、購入はしないものの手に取って眺めていた。今の私にとって最も鑑賞が難しいのは音楽でも絵画でもなく、詩である。詩を理解するのはとにかく

難しい。詩を理解するためには何かが必要なのだろうか。言い換えると、真に詩の世界に入っていくためには何かが必要なのだろうか。

詩的言語を理解し、詩の世界に深く入っていくことを希求する自分が芽生えてきた。以前フローニンゲンの街の古書店で、リルケやマラルメの原書の詩集を眺めていた。ドイツ語やフランス語を解しない私にとってそこに書かれていることは理解しようがなかったのだが、彼らの詩には妙に惹きつけられるものが以前からある。今すぐにとは言わないまでも、リルケやマラルメの詩集を原書で読みたいと思う。

シュリ・オーロビンドが詩について書いた書籍をその古書店で購入していたことから、やはり私の中に詩に対する強い関心があるのは間違いないだろう。その関心を少しずつ育んでいくようにしたい。

欧州での三年目の生活、そして今後は自分の探究活動のみに従事するような生活を形作っていかうと考えているため、詩をゆつくりと読むことも可能だろう。何よりもそれをしたいと望む自分がいる。

来月クレラー・ミュラー美術館を訪れることになっており、そこで仮に俳句もしくは詩集が売られていたら、良いものを購入したいと思う。また、街の行きつけの古書店に行き、リルケやマラルメの詩集をどれか購入したい。店主のテオさんに相談してみよう。フローニンゲン:2018/6/30(土)08:41

2773. 本日の振り返り

今日も夕方を迎えた。時刻は午後の六時半に近づいている。

今日は昨日よりも気温が高かく、とても暖かい一日だった。人によってはそれを暑いと言うかもしれない。今日はこれまで外出を一切しておらず、書斎の窓から外を眺めると、外の暖かさが伝わってくる。今日は午前中に一曲、昼食後に一曲ほど曲を作った。

早朝の作曲実践と昼食後の作曲実践が完全に習慣になり始めているのはとても喜ばしい。この調子で明日も曲を作っていこうと思う。今日の実践を通じてふと考えていたのは、確かに短い曲だけ

を作っていくことに焦点を当てながらも、その短い曲の中にもう少しストーリー性やメッセージを具現化させるにはどうしたらいいのかということだ。

俳句や短歌には物語性もあれば固有のメッセージもある。この点については作曲の原理原則である、多様性と統一性という考え方に立ち返ってみる必要があるかもしれない。曲の中の統一性は物語やメッセージを支える幹であり、多様性はその幹に備わる実のような存在だ。幹と実をうまく形作っていくこと。それを明日からの作曲実践で意識したい。

今日は計画通り、“The Inner Nature of Music and the Experience of Tone (1983)”の一読目を終えた。やはりシュタイナーの音楽理論さらには意識の形而上学的思想からは学ぶことが多い。今後芸術教育に対する自分の考えを深めていく際に、シュタイナーの思想は核となっていくだろう。明日はシュタイナーから影響を受けた音楽理論を展開している“Human Hearing and the Reality of Music (2013)”を読み進めていく。こちらの書籍に関してもすでに中身をざっと眺めてみたところ、本日読んだシュタイナーの書籍と同様に、あるいはそれ以上に得るものが多いことが期待される。

本書も分量としては多くないため、明日のうちに一読目が終わるだろう。このようにして着実に音楽理論に関する理解を深めていくことが大切だ。作曲実践だけに偏るのではなく、また理論の学習に偏るのでもなく、どちらも共に旺盛に行っていく。

夕方ふとしかきっかけで思ったのは、現在の自分の作曲実践のあり方と進め方、そして音楽理論の学習方法は、正規の学術機関に所属しては決して行えない類のものだろうということだ。おそらく正規の学術機関における作曲実践は、既存の枠組みの中で曲を作ることを強制され、音楽理論についても決してシュタイナーの理論など学ばないだろう。そこで行なわれている実践や学習内容がいかに高度に体系化されていても、非常に冷たいものに思われてくる。これまで人間発達の研究をする際に学術機関に所属していた経験からも、やはりそこには探究方法と学習内容に固有の制限が存在していることがわかる。どうやら音楽の世界に身を置いている知人から話を聞いてみると、これは音楽の世界においても同じようだ。

今日は作曲実践と読書以外にも、論文の修正を行った。昨日から作業内容と作業手順をイメージしていたためか、修正作業が想像以上に早く終わった。これで論文の修正も完了である。修正が早

く終わったため、明日に予定していた発表用のパワーポイントの作成に取り掛かった。これについても昨日の段階で構成と内容をイメージしていたため、発表資料もほぼ完成した。あとは文言やフォーマットの微調整をするだけであり、何回かプレゼンの練習をするだけとなった。一つ一つの事柄が計画通りに着実に形になっていく姿を見ることができて嬉しく思う。

明日は発表用のパワーポイントを完成版にし、何度かプレゼンの練習をする。明後日の月曜日には論文全体をレビューし、提出用の完成版を作りたい。フローニンゲン:2018/6/30(土) 18:42

2774. 友人のピアノコンサートに参加して

昨夜は上の階に住むピアニストの友人の修士課程修了コンサートに参加した。午後の七時前に自宅を出発した時、その明るさは夕方のもよりも明るく感じられた。日中は気温が上がっていたが、自宅を出発する頃は散歩をするにはちょうど良い気温であった。ゆっくりと30分ほど歩くと会場の音楽院に到着した。

コンサートホールの入り口にプログラムが置かれており、それを手にとって中に入った。すると会場の前方に見慣れた顔を発見した。近所に住んでいるミヘルさんがそこにいたのである。いつも思うが、ミヘルさんは70歳を迎えているのに常に活力に満ち溢れており、とても若々しい。

コンサート開始の10分前に到着したため、ミヘルさんと少しばかり雑談をしているとすぐにコンサートが始まった。今回のコンサートはプログラムに記載されているように、実質上は修士課程の卒業試験である。そのため、ピアノ演奏のみならず、友人が行った研究のプレゼンテーションが途中に挿入されていた。彼女と知り合ってから一年半以上になり、時折彼女の演奏会に参加したり、近所に住んでいるため時々話をしたりしていた。

今回の演奏とプレゼンテーションには彼女のオランダでの歩みが詰まっており、とても感銘を受けた。プログラムの合間の休憩の際に、隣に座っていたミヘルさんも彼女の変容に大きな感銘を受けたと述べていた。「フローニンゲンは人を開かせるんだよ」とミヘルさんは笑いながら述べていたが、自分自身のこの二年間を振り返ってみた時に、あながちそれも間違いではないと思った。

プログラムは武満徹の『雨の樹素描 II -オリヴィエ・メシアンの追憶に』から始まり、その次に彼女が修士課程で行った研究内容に関するプレゼンテーションがあった。これは心身のつながりからピアノ演奏を捉えていく研究であり、心身のつながりというのはちょうど私がジョン・エフ・ケネディ大学にいた時に強い関心を寄せていたテーマである。そうしたこともあり、プレゼンテーションの内容を終始興味を持って聞いていた。発表後の質疑応答で一つばかり質問をしたが、まさに最初の武満徹の曲を演奏する時に今回の研究内容が見事に活かされていることを感じた。

舞台の上でいかに自らの心身を整え、自分自身とつながっていくか。そして演奏中における心の有り様と身体の動かし方は演奏の質をこれほどまで変えてくれるものなのだと思った。

彼女は20年以上もピアノ演奏をしており、プロのオーケストラと共演するなどすでに実績を持っているが、フローニンゲンの音楽院での学びと今回の研究を通じて一段別の次元の演奏者に変容したのではないかと感じた。20年という長い年月をかけて音楽と向き合い、過去何度も演奏会やコンクールに出ている人間がこのように大きな変容を遂げ得るということに、改めて人間発達の奥深さを見たような気がした。

今回のコンサートは盛大な拍手と共に終了した。会場を後にして自宅に戻っている最中、この二年間の自分自身の歩みとこれからについて思いを馳せていた。正直なところ、この二年間の自身の変容が自分ではわからない。過去の日記で書き留めているように、何かしらの変容体験を積んできたように思うが、それが今になって捉えどころのないようなものに思えてきた。また、これからの自分の歩みについてもよく分からない。どれだけ自分はこれから歩けるのだろうか。そんなことを思いながら日が暮れぬフローニンゲンの夏の夜の街を歩いていた。フローニンゲン:2018/7/1(日)07:54

プログラム構成

- ・雨の樹素描 II -オリヴィエ・メシアンの追憶に- / 武満 徹
- ・Prelude in d minor from Suite for Harpsichord / Jean-Henry d'Anglebert (ジャン＝アンリ・ダンゲルベール)
- ・La Marella / Antoine Forqueray, transc. Jean-Baptiste-Antoine Forqueray (ジャン＝バティスト・アントワヌ・フォルクレ)
- ・Suite Bergamasque / Claude Debussy (クロード・ドビュッシー)

2775. 新緑のリズム

目の前に広がる大空に思わず手のひらを広げたいくなるような日曜日。目の前には紺碧の青空が広がっており、全てのものを優しく包んでいる。この青空をいつまでも眺めていたいという気持ちが起こる。

吸い込まれるような壮麗さを持つ青空を眺めていると、自我が溶解し、この世界の中に溶け出してしまいそうだ。実際に先ほどの自分は、自我が溶解していたのだと思う。自我が溶解した後に固有の内的感覚が内側に残っている。

欧州での三年目の生活。それは本当にこれまでの二年間以上に激烈なものにしていく必要がある。外形上はとても穏やかなのだ。人と関わることを一切やめ、とにかく自分の時間の中で自分のリズムで生きて行く。決して他人や社会をそこに関わらせてはならない。今の自分がなそうとすることの性質を考えると、他人との関わりほど不必要なものはない。極々少数の人とだけ時折交流があればそれでいい。もしくはそれさえなくてもいいかもしれない。

準備に時間がかかることを嘆くのはやめにしたほうがいいだろう。とにかく今の自分は準備の期間にある。この期間に他者や社会と関わることは御免であるし、準備の期間が終わってからもお同一層のこと御免である。私に必要なのは本当の人間関係であって、偽りや馴れ合いの人間関係ではない。後者の人間関係を通じて自らの人生を浪費したくはないという強い気持ちが沸き起こる。欧州に来てその気持ちは日々強まるばかりである。

今日の天気のスーパースタリシスは申し分ない。この季節がここまで晴天続きであったことをすっかり忘れていた。一昨日も昨日も今日も明日も明後日も晴天が続く。これから一週間はずっと晴れであり、先週もそのような天気だった。今はこの天気のスーパースタリシスを存分に享受しようと思う。またあの厳しい冬がやってくるのは確かなのだから、今はこの天気のスーパースタリシスを心の底から享受しよう。それ以外に何ができるというのだろうか。自分にできることなど本当に少ないのだ。

今日から七月を迎えた。欧州での二年目の生活もあとひと月となる。今月は区切りの月だ。実際に明々後日には研究の最終報告会があり、その日に論文を提出する。それをもって晴れてフローニンゲン大学での二つ目の修士課程を終えることになる。この二年間は実に様々なことがあった。また様々な経験を積んでいったように思う。

欧州での生活が、オランダでの生活がこれほどまでに自分の人生を深めてくれるものになるとは全く思ってもいなかった。欧州での生活も八月から三年目に入る。節目となる今月はフローニンゲンで一番気温が高くなる時期だが、それでも最高気温は20度前半であり、とても過ごしやすい。この時期を過ごすのはもう三回目なのだが、回を重ねるごとにこの季節の素晴らしさをより深く実感している。

厳しい冬を越える回数が増せば増すほどに、この季節の真価がわかる。物事の真の価値がわかるためにはどうやら必要な経験があるらしい。

今日も本当に新緑のリズムが聞こえてくるかのような素晴らしさだ。輝く太陽、爽やかな風、新緑の美しさ。こうした環境の中、自分はどう生きるかを毎日問われているような気がしている。

難しく考える必要はない。紺碧の青空のように、輝く太陽のように、爽やかな風のように、新緑のように生きればいいだけだ。フローニンゲン:2018/7/1(日)09:06

2776. 散りばめられた宝石

成層圏に触れられそうなスカイブルーの青空が広がっている。今はこの青空を一人で眺めていると、空のこの美しさを誰かと分かち合いたいと思う。

この空を天空と言わずして他にどのような天空がありえようか。一羽のカモメが優雅に青空を横切っていく。爽やかな初夏の風が街路樹を揺らしている。

何度でも繰り返し書き留めておきたいと思う。書斎の窓から見える景色の美しさは筆舌に値する。一見するとそれは何の変哲も無い景色かもしれない。しかし私にとってそれは、美の権化であるとか思えない。空には宝石が散りばめられていて、風にも宝石が散りばめられている。街路樹の一つ

一つの葉の中にも宝石が散りばめられているのだ。それが見えない馬鹿ではないことに感謝をし、それが見える馬鹿であることに感謝しなければならない。

目を開けていられないほどに世界が輝いている。この世界が対極で成り立っていて、光と闇によって作られているということを今この瞬間に持ち出すことは何の意味も持たない。

光しかないのだ。今この瞬間には光しかない。嘘ではなく本当に光しかない。

闇がかき消されてしまうぐらいの輝く光がこの瞬間を包んでいる。だから鳥たちがあのように自由に飛んでいるのだ。きっとそうだろう。そうでなければ説明できないことが多々ある。

光と美が顕現する世界を前にして、またしても自分が一人であることに気づいた。もっと一人になりたいと思う。諸々の煩わしいことから解放され、究極的に一人になりたいと思う。その実現に自分が向かっていることを知っているし、それは近い将来実現されると知っている。それが実現されれば、自分は光と美に還れるのではないかとすら思ってしまう。

時計の針を少しばかり巻き戻すと、今日は午前九時頃にどこからともなく鐘の音が聞こえてきた。ちょうどその時私は音楽を止めており、書斎の開いた窓から鐘の音が風に運ばれてきたのである。普段は教会の鐘の音など聞こえないのだが、今日は日曜日の静けさと部屋に音楽がかかっていること、そして程よい強さの風のおかげもあって鐘の音が自分の元に運ばれてきたのだと思う。

鐘の音の始まりから終わりまで私はずっと耳を傾けていた。自分の内側の何かが浄化されていくような感覚が伴った。

今日はすでに一曲ほど曲を作った。昨日、友人のピアニストの演奏を聴いたことに影響されてか、今朝はショパンではなく、ドビュッシーに範を求めて曲を作った。昼食後にもまたドビュッシーに範を求めて曲を作りたい。

昨日のコンサートで偶然一緒になった知人のオランダ人が現代音楽について興味深いことを述べていた。「現代音楽の美を過去の音楽形式の枠組みで捉えているとその美が全く見えてこない。もしかするとそこにあるのは美というよりも、より根源的な感情の渦であり、そうした渦を感じるのが現

代音楽を聞くことのポイントかもしれない」というようなことを述べていたのを思い出す。現代音楽と括られる曲の多くはなかなか理解しがたいものが多かった私にとって、友人の言葉は何か重要なヒントが含まれているように思えた。

今日はこれから“Human Hearing and the Reality of Music (2013)”の一読目を行う。本書の分量を考えてみれば、今日中に初読が終わるだろう。音楽理論の学習と作曲実践、そして日記の執筆を核とした生活をより強固なものにしていく。フローニンゲン:2018/7/1(日)10:58

2777. この世界の輝き

今日は昼食前に近所のスーパーに買い物に出かけた。一週間分のカレーを作るための材料が必要だった。

近所のスーパーに行く最中、私は何度となく空を見上げた。そこにはスカイブルーの空だけがあった。文字通り、そこにあったのは空だけであった。

空しかない空を私はずっと眺めていた。雲一つなく、どこまでも果てしなく続くスカイブルーの空を仰ぎてみて思わず息を飲み込んだ。あまりの空の美しさに私は思わず足を止めて空を眺めていた。今日の空はそれほどまでに綺麗だった。

時刻は午後の六時を迎えた。一週間分のカレーが今最後の煮込みに入っている。これから入浴をし、できたてのカレーを夕食として食べる。夕食後は再び作曲実践を行いたい。今日はすでにドビュッシーに範を求めて二曲を作った。夕食後にはバッハの曲に範を求める。バッハの曲を参考にして曲を作った後にまだ時間があれば、以前に街の古書店で購入した“The Future Poetry (1985)”を読み進める。以前から何度も書き留めているように、私の内側で詩に対する関心が徐々に醸成されている。今回シュリ・オーロビンドが執筆した本書を読むのもその現れである。

一つの詩をゆっくりと味わうような認識力とゆとりが欲しい。なぜなら、日々は一編の詩に他ならないのだから。

自分が作った曲を聴いて喚起される内的感覚をデッサンとして描くことが習慣になってみると、色々面白い気づきがある。一つには以前に指摘したように、曲にはやはり固有の色があることがわかる。デッサンをしていて気づくのは、必然的に手に入る色と手に入らない色があることだ。それはまさしく、聴いている曲に具現化されている固有の色がそこに存在していることを示唆している。

一つ一つの曲には固有の色があるがゆえに、デッサンの際に選ぶ色と選ばない色があるのだ。「音色」とは見事な言葉である。おそらくこの言葉を生み出した人物は音に色を見ていたに違いない。音楽を聴きながらデッサンをしてみると、その言葉の本質的な意味がありありと理解できる。

午前中から読み進めていた書籍を夕方に読み終えた。その中で、ゲーテが呼吸に宿る生成力について述べていたことが印象に残っている。何事においても本当に呼吸は大事だ。自己と繋がることにせよ、創造性を発揮することにせよ、それらは呼吸と密接に関係している。

呼吸の神秘についてはもっと真剣に探究していく必要がある。自ら呼吸法を実践し、その実践過程における観察過程を書き留めていきたいと思う。ヨガのインストラクターの資格を取得した時に学んでいたことをもう一度思い出そう。呼吸法の種類とその方法。日々の生活の中で改めて呼吸を意識していく。呼吸に全てが宿っている。

今、改めて夕方の空を眺めている。依然として雲一つない青空が広がっている。

昼前よりも今の方が太陽の日差しが強い。街全体が西日によって強い輝きを放っている。爽やかな風が時折駆け抜けていく。こうした光景が日常に存在していることの素晴らしさと有り難さを感じずにはいられない。今日の世界はまだ美しく輝いたままだろう。フローニンゲン:2018/7/1(日)18:22

2778. 主体客体作用を持つ日記の執筆

夕食を摂り終え、今から一日を終えていくための実践に従事したい。時刻は午後の七時半を迎えようとしており、依然として太陽が燦然と輝いている。今日は気温が高く、最高気温は27度を記録していた。明日からは一週間ほど20度前半の涼しい気温となる。

夕食を摂る前に日記の意義について再び考えを巡らせていた。改めて、日記を執筆することが最善の学びを生み出し、自己を深めていく最善の手段であるということを実感する。

依然私がマサチューセッツ州のレクティカに在籍していた時にお世話になっていたザカリー・スタイン博士が指摘していたように、日記の執筆には学習効果及び変容作用が内包されていることが疑いようのないものになってきた。当然ながら何をどのように日記として書き留めておくかが重要になるが、文章を書くことの中にはまだまだ隠された秘密があるようだ。日記を執筆することが深い学びを促し、自己を深めていく力を持っている理由としては、文章を書くことによる主体客体作用によるものが大きいだろう。

特定の知識項目を対象にして日記として文章を書くことは、その対象を客体化させることにつながる。その過程において、当然ながら書いてみるまでは気づかないような発見事項が得られることもあろうだろうし、書く過程の中で自分の考えが再構成されていく。また自己を対象に文章を執筆することは、自己という主体を客体化させることに他ならず、発達心理学者のロバート・キーガンが提唱している発達の原理に沿う。

学びを深めることにせよ、自己を深めることにせよ、そこには必ず未知なものを既知にしていくプロセス、つまり主体から客体へのプロセスが不可避に存在している。日記として文章を執筆していくことが学びや自己を深めることにつながる理由はそうしたところにあるのだと思う。

今日はこれからバッハの曲を参考に一曲ほど作る。69個の二声からなるコラールの一曲に範を求める。詰将棋を解くようなイメージでその曲を参考にする。今日から少しばかりメロディーに対する意識をより強く持ってみてもいいかもしれない。

昨日のピアニストの友人のコンサートに参加した際に、客席で一緒に聴いていた知人と休憩中に立ち話をした時、改めてメロディーの重要性に関する気づきを得た。また、少し前から再度取り掛かろうと思っていた“Melody Writing and Analysis (1960)”を再び紐解く時期に差し掛かっているように思う。もう一度メロディーの大切さを考え直し、本書を読み進めながら美しいメロディーを生み出す方法を実践を通じて学んでいこうと思う。少しずつ着実に歩みを進めていき、その一步一步の歩みを日記に書き記していく。フローニンゲン:2018/7/1(日)19:41

今朝は五時前に起床し、五時半あたりから一日の活動を開始した。ここ最近、早朝に少しばかり経済ニュースを確認するようになっている。内面世界と密接に関わった探究の日々を続けている反動として、外側の世界、特に世界経済へと目が開かれているのかもしれない。一日の活動を始めるための準備としてニュースを数十分ほど確認するというのも悪いことではないだろう。経済を起点として世界がどのように動いているのかを把握するように今後も努めたいと思う。

時刻は早朝の六時を回った。昨日に引き続き、今朝も一切の雲がない晴天の空が広がっている。

今朝の起床は五時前であったからいつもより早く、ちょうど日が昇り始める頃のタイミングであった。薄い赤紫色の朝焼けを目撃したのを覚えている。幸運にも早朝から美しい光景を見ることができた。今日の最高気温は23度とのことであるから比較的涼しい。早朝のこの時間帯は実に爽やかであり、優しい風が吹いている。

今日の計画について少しばかり書き留めてから本日の活動を本格的に始めたい。今日はまず最初に、過去に作った曲の編集をする。これも毎朝の日課となっており、これまでは毎日一曲しか作っていないかったため、編集も一曲に対して行うだけだったが、ここ最近は一日に二曲から三曲を作っているため、この数日間は二曲ほど編集するようにしている。今日もまずは二曲ほど編集を行う。その際に、いつものように曲を聴いて喚起される内的感覚をデッサンとして残しておきたいと思う。デッサンと編集が終われば、その流れで一曲ほど作る。今日は再びショパンに範を求めようと思う。

昨日の早朝はドビュッシーに範を求め、ドビュッシーとショパンのそれぞれが持つ異なる個性を目の当たりにすることになった。過去の作曲家に範を求めながら作曲実践を行ってみると、こうした個性の違いが如実にわかるので実に面白い。

ショパンに範を求めて曲を作ったら、“The Future Poetry (1985)”の続きを読み進める。本書は300ページほどの分量であるため、今日一日で全てを読み切ることは難しいかもしれないが、できるだけ本日中に本書を読み進めたいと思う。本書を読むことに並行して、昼食前か昼食後にもう一度作曲実践を行う。午後からも引き続き上記の書籍を読み進めていく。

夕食前の夕方に、明後日に控えている研究発表のプレゼンテーションの練習をしておきたいと思う。すでに発表資料がほぼ完成しており、プレゼンテーションの練習をしながら修正が必要であれば資料に修正を施す。仮に時間が余っていれば、過去の日記の編集にも着手したい。

これから本格的に一日の活動を開始したいと思う。目の前に広がる広大な空と景色を眺めていれば、今日が充実した日になることを疑うことなどできはしない。フローニンゲン:2018/7/2(月)06:20

2780. 外

今朝の目覚めから二時間ほどが経った。意識は完全に本日の活動に向けて準備が整ったと言える。

今朝方五時に起床した時の朝日をまた思い出している。ほのかに赤紫色を帯びていた朝焼け。それを眺めながら、今日の始まりを知り、一日の活動に向けて何かが静かに燃え上がってくるかのような感覚。

今しがた過去に作曲した曲の編集を終えた。今日のフローニンゲンの晴天と相まって、初夏の祝祭のような感覚を一つの曲が生み出していた。本当に今日は初夏の祝祭のようだ。祭りのような華やかさは一切ないのだが、非日常的な感覚を私に引き起こすという意味で祝祭だ。

また別の曲を聴いていると、似たような感覚があった。祭りは小波から始まり、その小波が次の祭りの波を生み出していくという実感。やはり日々は非日常的な祭りの要素を絶えず持っており、小波なのだろう。

日常が非日常に思えるということ、非日常が日常に思えるということの意味や意義はどのようなところにあるだろうか。その意味については述べる必要はないだろう。もはや語る必要のないほどにありありとしたものなのだから。

それではその意義についてはどうだろうか。つまるところそれは、日常と非日常の全的な一致にあるように思える。あるいは、日常と非日常を超越した場所で日々を営むことを可能にすると言えるか

もしれない。今の私はどこか、日常と非日常を超えたところで毎日を生きているように思えて仕方ない。

日常の足音も聞こえるし、非日常の足音も聞こえる。いや、彼らの歌声だって聞こえる。そうした音や声が聞こえることは、自分が両者を超越、もしくは超出していると述べてもあながち間違いではないだろう。

先ほど改めて、学術機関の外で探究することの大切さを思った。既存のアカデミアには自分が探究したいことはほとんど無い。あったとしてもそれが全くもってつまらない形で探究されている。アカデミアのつまらなさはどこから来るのかも考えていかなければならない。

賢く無能な盲目人が集まると、そこでなされる探究がしらけたものに見えてきてしまう。これは厄介な問題だ。

自分が探究しようとしていることの大部分、もしくは根幹部分が語られることを許容されないようなアカデミアで探究を続けていても仕方ないという潔い諦念の思いがここ最近芽生えた。それはちょうど五月末に行われたアムステルダムでの学会に参加した時のことだった。一応学会で発表をしたものの、発達科学の優れた学者の発表を聞くよりも、ゴッホの画集を眺めることや意識の形而上学に関する書物を読む方がもっと魅力的であった。また、学会よりも日記や作曲の方がより重要であった。

以前、何かしらの学術機関に再度入り直して音楽を学ぼうと思っていたが、それは本当にやめた方がいいと思うようになった。作曲に関してもアカデミアの外で行っていく。

とにかく外。作られた世界の外で生きていく。

この世界で疎外された人々への共感の念が増していく。ゴッホの手紙に立ち返ろう。そのようなことを考えながら、今日の実践に打ち込んでいく。フローニンゲン:2018/7/2(月)07:27